

一橋大学附属図書館の蔵書管理とその利用

－大学図書館ランキングにみるコア・コンピタンス－

豊田 裕昭, 高橋 菜奈子

抄録: “大学図書館ランキング” の上位に位置する一橋大学附属図書館のコア・コンピタンスを蔵書冊数, 受入図書冊数, 貸出冊数, 図書館費の4つの項目にそって分析した。中央図書館制度とそれを支える学内予算配分方式で社会科学系に特化した良質な蔵書を構築してきたこと, 複本購入をしないため資料保存への意識が高いこと, 100万冊の開架を実現し, 書架展示等によって利用促進を図っていることなどを紹介した。

キーワード: 一橋大学附属図書館, コア・コンピタンス, 大学図書館ランキング, 蔵書構築, 書架展示, 資料保存, 中央図書館制度

1. はじめに

一橋大学は明治8(1875)年に銀座尾張町に開設された商法講習所以来, 130年余りの歴史を持つ社会科学系の総合大学である。現在は4学部7研究科で学部生約4,500名, 大学院生約2,000名, その他聴講生や科目履修生等約500名, 併せて約7,000名が在籍している。

附属図書館は明治18(1885)年に神田一ツ橋通町に17.7坪の書籍庫と15.75坪の閲覧所, 図書掛3名からなる図書室が設けられたのを出発点として, 社会科学系を中心とした資料を蓄積し, 本学の研究教育を支援してきた。昭和5(1930)年に国立キャンパスに移転し, 幾度かの増改築を経ながら現在に至っている。そのスタイルは, 昨今の潮流である電子的な図書館事業にも取り組む一方で, 極めて基本的, 伝統的な図書館を頑なに維持するというハイブリッド的な性格を有している。本稿では, 本学附属図書館のコア・コンピタンスというものを紹介する。

コア・コンピタンスは, 心理学や経営学などで良く使われる用語であり, 定義や解釈には様々あるようであるが, 単純に解釈すれば, 中核となる強みということで, 企業などでは“他社にはまねのできない自社ならではの価値を提供する, 企業の中核的な力”とも解釈されている¹⁾。それを図書館に当てはめると, 他館と比べて独自性や優位性がある中核と

なる事業やサービスということになるであろう。しかしながら, 何を以って他館よりも独自性や優位性があると判断できるのか, この位置づけや評価も難しい。

そこで, ひとつの指標として朝日新聞社が毎年発行している『大学ランキング』²⁾の中にある“大学図書館ランキング”をとりあげ, このランキングの観点から本学附属図書館のコア・コンピタンスがどの点にあるのかを考えてみたいと思う。考えるに当たっては, 決して, ランキングの数値のみにこだわることなく, 業務やサービスの内容的, 戦略的視点から, 優位性, 独創性を捉えたいと思う。

2. “大学図書館ランキング”とは

“大学図書館ランキング”は, 朝日新聞社が全国の国公私立大学にアンケートを実施し, 毎年約620校から回答を得て, 学生1人あたりの全学の蔵書冊数, 受入図書冊数, 貸出冊数, 図書館費について, それぞれの最高値を100として指数化したものである³⁾。現在の算出方式では, 各項目における指数を合計し, その最高値を100として指数化したものが, 総合ランキングとなる。出版社が主体となって基本的な要素と客観的な数値で全国規模の評価をしている点で独特の外部評価である。

表1には現在の算出方法に変わった2003年以降

表1 “大学図書館ランキング”各部門1位の大学

	総合順位	蔵書	受入	雑誌	貸出	図書館費	Webcat
2003	一橋大	天理大	川村学園女子大	奈良女子大	国立音楽大	長崎県立大	—
2004	名古屋市大	天理大	名古屋市大	—	国立音楽大	名古屋市大	—
2005	京都大	天理大	筑波大	—	国立音楽大	京都大	—
2006	北海道大	天理大	大阪教育大	—	国立音楽大	京都大	東京大
2007	国際基督教大	天理大	文京学院大	—	国立音楽大	京都大	東京大

の各部門第1位の大学をまとめてみた。受入冊数以外は各部門で毎年第1位を獲得する圧倒的に優れた大学があることがわかる。また、“大学図書館ランキング”の項目自体が毎年少しずつ変更されていることも読み取れる。特に雑誌の種数という項目が消えて、この後、電子ジャーナルの利用可否が登場した点などは時代を反映しているのかもしれない。

もともと、蔵書冊数、貸出冊数という評価指標は雑誌よりも図書の所蔵と利用に重点を置いたものであるが、雑誌種数が評価対象から外れたことによって、より図書への比重が増したように思われる。雑誌をメインの資料としている自然科学系の大学にはそもそも不利な指標といえるだろう。電子ジャーナルについては今のところ利用可否が“○”か“×”かで示されるだけだが、この指標が点数化されるようになると、総合順位の入替わりがあるのかもしれない。現在のところ、毎年継続してみることでできる項目は、学生1人あたりの蔵書冊数、受入冊数、貸出冊数、図書館費である。

図書館の電子的サービスという面に関しては、2006年から“大学図書館ランキング(Webcat)”という別の部門が設定された。しかし、その内容はNACSIS-CATへの所蔵登録件数が示されているのみである。このため、もともとの所蔵冊数が多い大学、遡及入力が進んでいる大学が上位を占めることになる。

このように、“大学図書館ランキング”は評価の指標としては必ずしも実態を正確に表すものとは

いえませんが、全国の図書館レベルで本学が、どのくらいの位置になるのかを理解するための参考数値になる。

表2にはここ10年間の一橋大学の指数と順位をまとめた。年度により算出方式が異なるものの、総じて上位の良い評価を受けている。しかし、部門別にみると1位を獲得している部門はなく、蔵書冊数が比較的高得点であるが、全体として満遍なく得点を上げていることが、総合順位の好結果に繋がっているものと思われる。本学では、決してランキングを意識して業務を行っているわけではないが、以下では、数字的には全学数値であるが、先に掲げた毎年継続して指数化されている4つの項目にそって、その中心的存在である本学附属図書館の独自性、優位性等を紹介する。

3. 蔵書

最初の指標は蔵書冊数である。蔵書冊数は、他の受入冊数や貸出冊数などのように、年度によって増えたり減ったりするものではなく、基本的に増え続けるものであり、またそれは受入冊数や図書費との関係が深い。表3には平成19(2007)年3月31日現在の附属図書館と隣接する社会科学古典資料センターの蔵書冊数をまとめた⁴⁾。本学の蔵書は、社会科学系の総合大学として、基本的に研究教育活動に沿った資料を体系的、網羅的に収集する方針で収集してきており、その中でも附属図書館で所蔵している蔵書冊数は約175万冊(全学で約245万冊)であ

表2 一橋大学の総合(学生一人あたり)の数値

	総合								Webcat	
	順位	蔵書	受入	雑誌	貸出	図書館費	指数評価	電子ジャーナル	順位	所蔵数
1998	1位	A	A	A	B	A	282.9	—	—	
1999	3位	83.0	41.8	—	20.7	99.6	245.1	—	—	
2000	2位	A	A	B	A	A	278.9	—	—	
2001	30位	A	B	B	B	B	129.0	—	—	
2002	1位	A	A	B	A	A	275.4	—	—	
2003	1位	77.0	37.3	23.6	29.7	79.7	100.0	—	—	
2004	2位	75.9	61.2	—	30.1	88.7	97.5	—	—	
2005	2位	70.9	42.9	—	25.5	62.6	99.2	○	—	
2006	3位	68.0	27.6	—	25.1	67.8	88.2	○	15位	611,871
2007	4位	65.5	42.5	—	22.1	74.4	87.6	○	15位	649,551

注：表2のアルファベットは、奉仕対象学生1人当たりの蔵書冊数、受入冊数、雑誌種数、貸出数、図書館費のそれぞれの最高値を100として指数化し、数値の高い順に上位7%の大学にA、次の24%にB、次の38%にC、次の24%にD、下位の7%にEが付されている。

表3 蔵書冊数 (平成19(2007)年3月31日現在)

資料区分 / 所蔵部署		附属図書館	社会科学古典資料センター	計
図書 (冊)	和	914,537	4	914,541
	洋	833,638	75,670	909,308
	計	1,748,175	75,674	1,823,849
雑誌(種類)	和	6,569	0	6,569
	洋	9,792	0	9,792
	計	16,361	0	16,361
電子ジャーナル (種類)		2,827	0	2,827
マイクロフィルム (種類)		759	713	1,472
マイクロフィッシュ (種類)		131	0	131

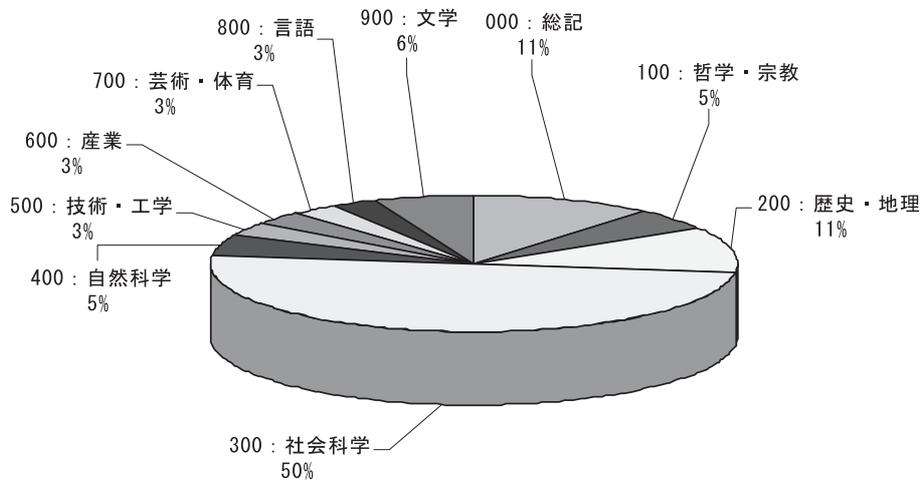


図1 開架図書分類別蔵書構成 (NDC大分類)

る。一方の奉仕対象学生数は、学部生・大学院生併せて約7,000名であり、1人あたりの蔵書数は約350冊程度である。

統計上の曖昧さはあるものの、この蔵書という視点で本学附属図書館のコア・コンピタンスを語るならば、量的なことは、過去から継承してきた遺産であり、本学の伝統の中で営々と培われてきた蔵書構築の結果といえるだろう。全蔵書冊数は本学より優れた数字を示す大学は多々あるが、学生1人当たりの冊数は常にランキング2位となっている。しかも、単なる客観的な蔵書冊数では計れない蔵書の質において、本学の独自性を語る事が出来る。

第一には、社会科学系に特化した蔵書構築である。附属図書館開架図書の蔵書の構成をみると、全蔵書の5割は社会科学系であり(図1)、閉架書庫分及び学内他部署資料室の蔵書を併せると、この割合はもっと伸びるものと思われる。公共図書館が一般書やベストセラーを並べるのとは違い、大学図書館は、その使命や役割から大学の研究教育分野に必要な学術書や専門書を揃えることが重要である。

社会科学系の複数の学部、研究科を有する本学附属図書館の蔵書が、その研究教育分野に特化するのには自然なことであり、大学図書館ではそれが許され、また、そのような蔵書構築が本学附属図書館の独自性であり、ひとつの強みとなっている。

社会科学系の総合大学である本学の附属図書館の全蔵書の半数が社会科学分野で占められているということ、しかも後述するが原則的に複本は受入しない方針であるということを含め、蔵書冊数という単なる量的な数字以上に内容の充実度は誇れるものがあり、優位性があると考えている。

第二の特徴は中央図書館制度をとっていることである。これは図書や雑誌の収蔵場所を分散させず、運営費交付金で購入する資料は、原則として中核となる中央図書館に集中配置する伝統的な仕組みである。つまり、西洋古典籍は、社会科学古典資料センターへ置くなどの、一部に例外はあるものの、各研究科の予算で教員の選書により発注した図書であっても、購入した図書は附属図書館に置くのが原則である。

教員は附属図書館に配置された図書を学生と同様にカウンターで借りるのが基本的な手続きであり、年に1回貸出の更新手続きをしなければならない。このようにして、図書は大学の財産資源として、学生と共有すると同時に、資料の重複購入を避け、資料費の有効活用を図っている。

第三の特徴として、全蔵書の10%を占める60以上のコレクション資料がある。各コレクションの詳細はホームページから見る事ができる⁵⁾が、その内容又は形態等に特色があり、附属図書館の蔵書の独自性を示すものである。年代的にみれば、刊年・書写年代の古いものあるいは初版本・限定版といった、いわゆる貴重書に該当する資料は少なく、特に洋書の貴重書は社会科学古典資料センターに配置することになっている⁶⁾ため、附属図書館ではほとんど所蔵していない。しかし、図書資料のコレクションの場合、資料群としてのその価値を考えるべきであり、評価のポイントはそのコレクションがカバーする範囲が広範で良質な書物を多数収集しているか否かという視点から捉えられるべきである。

本学のコレクションは、本学の元教員から受贈した図書、本学にゆかりの研究者等から受贈した図書、社会科学分野のまとまった資料群を本学で購入した図書であり、この点で社会科学分野の良質な研究書のコレクションとなっている。また、コレクションを評価する際には、旧蔵者が著名な人物であれば、その人物自体の思想研究等に資するという側面もある。この観点から貴重なコレクションとして、同時代の学問界・思想界に大きな影響を与えた福田徳三やシュンペーターら本学にゆかりの人物の手稿類も

所蔵している。その他に、紙幣やコイン、写真、書簡、テープ等の非図書資料、近世古文書、近代の記録文書等もコレクションとして所蔵しており、いずれも社会科学分野の研究素材として利用価値が高い。

『大学図書館の管理と運営』⁷⁾では大学図書館資料の種類として、①学習的機能のための資料、②研究的機能のための資料、③レファレンス機能のための資料、④文化的機能のための資料、⑤レクリエーション機能のための資料を挙げている。この種別に照らしてみると、社会科学の分野に特化した①と②の資料を数多く所蔵しているという意味で、本学の教育・研究を支える良質な蔵書となっていると考えてよいだろう。

4. 受入

4.1. 購入

受入には、購入によるものと、寄贈によるものがあるが、購入の場合は、少なからず図書館費の影響を受ける。附属図書館における近年の受入冊数の推移は次の表4のとおりである。購入の場合、法人化以降の専門図書費の削減を受けて、大きく受入冊数が減少している。

本学の受入の方針に関しては、原則的に複本は購入しないことが特筆できる。多数の利用が見込まれるシラバス掲載図書、1冊が禁貸出となる本学関係資料や本学教員著作寄贈図書は複本の購入が認められているが、その場合でも複本として購入するのは1～2冊程度である。これは、研究室に図書を配置しない中央図書館制度のメリットを生かした方針で

表4 受入数

資料区分 / 年度		平成9年度 (1997)	平成10年度 (1998)	平成11年度 (1999)	平成12年度 (2000)	平成13年度 (2001)
図書 (冊)	和	12,962	11,985	14,028	13,470	20,990
	洋	15,928	13,552	15,214	12,982	15,459
	計	28,890	25,537	29,242	26,452	25,449
雑誌 (種類)	和	1,746	1,743	1,752	1,729	1,728
	洋	3,519	3,363	3,331	3,285	3,302
	計	5,265	5,097	5,083	5,014	5,030
資料区分 / 年度		平成14年度 (2002)	平成15年度 (2003)	平成16年度 (2004)	平成17年度 (2005)	平成18年度 (2006)
図書 (冊)	和	17,711	16,245	12,222	12,233	13,050
	洋	13,497	9,378	10,952	10,970	8,874
	計	31,208	25,623	23,174	23,203	21,924
雑誌 (種類)	和	1,738	1,758	1,803	1,756	1,837
	洋	3,269	3,358	3,292	2,908	2,754
	計	5,007	5,116	5,095	4,664	4,591



図2 第2回資料保存研修会（“鐘”37より再掲）

あり、限られた予算とスペースで蔵書の充実度を高めるものである。

また、この複本を購入しない方針というのは、必然的に資料保存に対する意識を高める結果に繋がった。全学で1冊しかない図書を大切に利用し、後世に伝えていくためには資料保存の措置が必須である。日々、職員が簡易な補修を行うもののほか、外注でも修復・保存措置を行っている。学内の図書系職員を対象にした資料保存研修会の開催（図2）⁸⁾や、図書館システムへの保存カルテ登録機能の導入等は、資料保存に対する本学の姿勢を示しているといっていよう。隣接する社会科学古典資料センターに修復工房が存在し、資料保存の専門家集団を抱えていることも、また、種々の取り組みを容易にしてきた。平成12（2000）年度からは、本学で培ってきた保存に対する技術・知識を全国の図書館員と共有すべく、西洋古典資料保存講習会も開催している。資料保存の取り組みは莫大な費用がかかる上に、成果が目に見えにくい地味な作業だが、文化遺産としての図書を後世に残すという大切な図書館活動である。この分野も本学にとってはコンピタンスといえるだろう。

4.2. 寄贈

購入に対して、寄贈受入も蔵書構築のもう一方の柱である。本学で独自性の高い寄贈資料としては、大学の構成員であり、かつ図書館の主なる利用者である学生と教員からの寄贈がある。自らの成果物、著作物という観点から積極的に受け入れている。

学生の著作物としては、主に卒業論文、修士論文、博士論文等を受贈している。図書館で修士論文、博士論文を保存するというのは他館でも珍しくないかもしれないが、卒業論文の収集・保存は、本学の独自性を示すものといっていよう。指導教員を通して寄贈されるので、すべてを網羅しているというわけではないが、毎年確実に約2,000冊が執筆され、

そして附属図書館に寄贈されてくる。その割合は卒業生総数が約73,000名（1902年の東京高等商業学校改称以降2007年3月末まで）、であるのに対して、卒業論文、修士論文、博士論文等の所蔵数はこの100年余りで約48,000冊、まだ寄贈されずに教員の手元で保管されている卒業論文が多く存在しているが、現時点での収集率は約66%である。

各界に著名な卒業生を輩出する本学にとっては、卒業論文は貴重な著作物である。平成18（2006）年度から始まったホームカミングデーにおいては、附属図書館での本人への卒業論文閲覧、複写サービスが好評を得たのはいうまでもない。

卒業論文に類するものとしては、修学旅行報告書も特異なコレクションである⁹⁾。明治21（1888）年から大正にかけて本学で実施された修学旅行制度は、成績優秀な学生若干名を選び、夏期休業中に旅費を給付して地方商工業の状況を視察させて報告書の提出を義務づけたものである¹⁰⁾。中には今日でも研究者に利用されている貴重な報告書も含まれている。

一方、教員からの寄贈図書も今後重点的に収集する方針である。本学の教員の著作は年間100冊程度あるものと推測されるが、寄贈されることは少ない。勿論、今までも本人の著作物の寄贈は受入をしてきたが、通常の寄贈と何ら異なることなく、単なる寄贈資料として、受入処理をしてきた。寄贈されなかったものについても概ね購入によって収集してきたが、今後は、戦略的に寄贈を訴える手法が必要と考えている。

平成18（2006）年度からは、“本学教員著作寄贈図書コーナー”という別置コーナーを館内に新設し、また、“一橋教員の本”というホームページを立ち上げた¹¹⁾。大学のホームページのトップで広報する“一橋教員の本”では、本学に所属する教員の著作を網羅的に紹介している。教員著作の出版に関する情報を網羅的に集めるために書店等を通じて情報収集し、さらに、著者からのコメントを付すことにより、更なる付加価値を加えたページづくりを行っている。一方、それらの本は、附属図書館に新設された“本学教員著作寄贈図書コーナー”に展示する。他の蔵書との差別化を図っているということをアピールすることにより、寄贈を促進する狙いである。このコーナーの開設から約4ヵ月を経過した平成18（2006）年度末の時点で、すでに約120冊が寄贈され、順調な滑り出しである。

また、近年、増加しているのが外部からのまとまった数量の寄贈の申し出である。申し出があっても、必要な図書だけを混配するのであれば問題ないが、

別置となると、コレクション等の受入要項が別に定められており、学術的又は資料的価値や一定の数量、既蔵資料との重複などの視点から、関係する教員のワーキンググループにより慎重に検討され、附属図書館委員会に諮られる。別置コレクションとして受け入れることが決定した場合は、燻蒸を行った後に、受入・整理作業にとりかかる。これは書庫内の別置コレクションが配置されたフロアは、すでにフロア全体が燻蒸済みであるので、害虫を持ち込まないためである。平成18(2006)年度にも新規受入予定のコレクション資料を燻蒸している。

5. 貸出

5.1. 物理的要因

本学の大学図書館ランキングにおける学生1人あたりの貸出指数は20から30の間で推移している(表2)。この値は低くみえるが、連年1位の国立音楽大学の貸出数が圧倒的に多いため、実は指数20を超える大学は少ない。順位で見ると本学は5~7位で安定している。

表5には館外貸出冊数をまとめた。貸出冊数の伸びに繋がる要因には、図書館に利用者の必要とする資料が揃っているということや、書架を眺めて手にとって中身を確認できるという物理的な環境が整っていることなどが考えられる。これらは、必要なものがどれだけ揃っているかという意味において、少なからず蔵書数や受入数とも関係してくるが、その中で本学の独自性、優位性を挙げるならば、中央図書館制度と開架100万冊である。

中央図書館制度は既述したが、ひとつの図書館内で約175万冊にアクセス出来る環境を提供することにより、貸出可能資料を最大限に集中化し、利用者の研究調査活動の利便性、迅速性に貢献するもので

ある。

開架100万冊については、他の国立大学図書館では類を見ない開架冊数を提供することにより、書物の意外な発見や、偶然な出会いを演出するものである。平成12(1998)年の増改築により、第一書庫を解体し、蔵書のうち100万冊以上の開架環境を実現した。大半は電動集密書架による使い勝手は決してよくない環境であるが、それまでの閉架出納式から、資料が自由に手にとって中身が確認できることや、ブラウジングにより類似資料の発見が可能になったためか、貸出冊数は約20,000冊(前年比20%以上)の増加を示している。開架冊数の増加にともなって、書架の乱れは当然生じてくる。日々の書架整備に加えて、月1回の全館体制での書架整備、年1回アルバイトを雇用して全館体制で行う蔵書点検で、定位置への配架の維持に努めている。

5.2. 心理的要因

貸出冊数を伸ばすためには、物理的要因のみではなく、心理的要因を創り出すことも重要である。利用者の、ある特定の図書を読みたいという意識されたニーズへの対応は、購入リクエスト制度という形で比較的対応しやすく、また多くの図書館で行われていることである。では、意識されていないニーズに対してはどのように取り組むのか、すなわち、いかに意識されていないニーズを呼び起こし、資料を手にとってもらえるようにするか、この動機付けすることが重要となってくる。そのためには、図書館が有する知識や技術、材料やノウハウを駆使して、埋もれている図書に何かしらの価値を付加して、刺激を与え、ニーズを呼び起こすことが重要と考えている。

その手法のひとつが展示である。展示は本学にお

表5 館外貸出冊数

冊数/年度	平成9年度 (1997)	平成10年度 (1998)	平成11年度 (1999)	平成12年度 (2000)	平成13年度 (2001)
教職員	8,885	9,289	8,614	9,785	11,364
学生	84,895	95,717	104,228	123,715	127,356
学外者	3,433	6,073	9,418	9,944	9,313
	97,213	111,079	122,260	143,444	148,033
冊数/年度	平成14年度 (2002)	平成15年度 (2003)	平成16年度 (2004)	平成17年度 (2005)	平成18年度 (2006)
教職員	12,093	10,064	9,701	11,482	12,930
学生	121,387	120,796	107,922	114,399	118,259
学外者	6,293	960	1,356	1,389	1,277
	139,773	131,820	118,979	127,270	132,466



図3 TZ本の紹介コーナー展示



図4 本学教員著作寄贈図書コーナー展示

いてはコアな事業であり、いくつかの複線的な展開をしている。平成12(1998)年度に開室した公開展示室では、常時、コレクションの紹介や本学の学園史に関する資料の展示を行っている。さらに、毎秋、貴重資料を中心に大規模な公開展示も行う。このようなコレクションを広く紹介する展示は本学に限らず多くの図書館で行われているが、本学の展示の独自性を挙げるのであれば、館内の一般書架上での図書の紹介展示である。これはターゲットを教員や一般市民ではなく学生に置いた2つのコーナー展示である。

第一に“TZ本の紹介コーナー展示”がある。TZとは、附属図書館に多大な御寄附を頂いた高本善四郎氏を顕彰し、そのイニシャルを冠したものである。このコーナーは、職員が持ち回りで、2～3ヵ月に1度あるテーマを決めて、それに関連する資料を書架から抜き出し紹介するもので、テーマの設定が様々であり、興味深いものとなっている(図3)。

ここで重要となるのは、作成する紹介用のリーフレットである。わずか表裏1枚程度のものであるが、テーマに沿った説明や解題を添えることで、展示資料に付加価値を与え、利用者のニーズを刺激し、書架に埋もれていた図書の利用を促すようにするものである。リーフレットはホームページでも公開する¹²⁾。さらに、このコーナー展示の最大の特徴は、展示資料はすべて、展示期間であっても、閲覧も貸出も可能としている点である。まさに利用促進のための展示といえる。

第二は、先にも紹介した“本学教員著作寄贈図書コーナー展示”である。教員の著作を並べるコーナーを設けている図書館は他にもあるだろうが、本学の場合は、通常は廃棄してしまう図書のジャケットを残したまま書架展示を行っているのが独自な点である(図4)。

ジャケットのあるものと、ないものを混在して整

理することや、配架することは、手間や混同の問題、ジャケット破損や紛失時の課題があるが、独自性はこのような課題を超越するところにあるものと考えている。

また、教員の著作は、少なからず研究、教育と結びついており、学生にとっては、心理的要因をくすぐるものであり、ある意味ではシラバス掲載図書よりも必読書かもしれない。先述のとおり、大学のホームページにも著者コメント付きで紹介をおこなうことにより、著者からのメッセージという新たな付加価値を与え、貸出、閲覧に向けての演出を図るものである。

6. 図書館費

法人化以前の国立大学は、国からの予算配分を受けて図書館の経営を行ってきた。図書館費に関しては、図書館の生活費・物品購入費としての運営費・整備費・事業費まで含めて考えるべきではあるが、本学で特に独自性の強い点は専門図書費をめぐる学内での予算配分方式である。

専門図書費とは、所謂附属図書館の資料費のことで、昭和45(1970)年に、予算委員会において、附属図書館の専門図書費配当額は校費の20%以上とするの方針が確立されて以来、平成9(1997)年度から実施された予算配分方式では、当初配分可能額の22%が、必ず、専門図書費として配分されている。さらに、商学研究科、経済学研究科、法学研究科、社会学研究科、言語社会研究科、国際企業戦略研究科の各研究科に配分された研究科等経費の60%以上を各研究科の洋図書購入を目的として学術資料整備費、つまり専門図書費の洋図書購入費に振替えるということになっている。学術資料整備費で購入する図書の選書は各研究科が行なうが、図書は附属図書館に配置される。一種の全学共通経費化ともいべき予算配分方式であり、これが本学の蔵書

表6 図書館資料費（専門資料費）

（単位：千円）

区分/年度	平成9年度 (1997)	平成10年度 (1998)	平成11年度 (1999)	平成12年度 (2000)	平成13年度 (2001)
学校校費配分	260,459	256,827	271,250	289,169	290,619
文部科学省事項指定	63,013	59,291	60,555	62,367	70,097
その他（他部局からの振替等）	3,464	1,567	19,543	△60	△4,085
計	326,936	317,685	351,348	351,476	356,631
区分/年度	平成14年度 (2002)	平成15年度 (2003)	平成16年度 (2004)	平成17年度 (2005)	平成18年度 (2006)
学校校費配分	294,550	299,194			
文部科学省事項指定	58,682	60,141			
その他（他部局からの振替等）	2,053	7,224			
計	355,285	366,559	360,356	323,460	321,541

注：表6の平成12年度及び13年度の△は、他部局へ振替えたため減額となったもの。

構築を支えてきた仕組みであるといえる。

しかし、国立大学は平成16（2004）年4月に国立大学法人となり、その財政構造を大きく変化させた。国立学校特別会計によって全国の国立学校が一体的に管理されてきた体制から、各国立大学法人が用途制限のない運営費交付金という形で個別に国から財源措置される方式への変更である。各大学の自由度が増す一方で、中期目標・中期計画に相当した成果を求められるようになった。さらに運営費交付金には毎年1%の効率化係数が課され、何もしないと予算は減少していく。

このような財政環境の変化に附属図書館も対応しなくてはならない状況にある。本学の場合、運営費交付金の中から学内で附属図書館に配分される予算は、資料費として専門図書費、図書館の生活費である一般管理費、図書館の物品等を購入するための図書館経費に3分割される。

このうち、図書館の生命線ともいえる専門図書費をみると、表6のとおり、法人化2年目の平成17年度に効率化係数をかけられて大きく減少してしまっている。洋図書の継続図書と参考図書、外国雑誌等について見直しを行い、何とか最初の予算削減を乗り切ったが、社会科学系の図書館で専門図書費を削減することへの危機感は大きい。本来なら法人化3年目以降もさらなる効率化係数をかけて資料費が削減される場所であるが、幸いなことに蔵書構築への悪影響に対する危機感については全学的な理解が得られ、法人化3年目の平成18（2006）年度と翌19（2007）年度は専門図書費の削減をしないという学内措置を得ている。もっとも、この措置は専門図書費だけなので一般管理費と図書館経費は法人化2年目に前年度比11%、3、4年目は各7%が削減

されている。

運営費交付金に替わる財源として、寄付金は大きな存在である。数年前、用途を図書館資料整備に限定した寄付の申し出があり、現在は高本善四郎図書助成金や釜江隆行記念図書寄附金として学生用図書購入のための貴重な財源となっている。また、本学では卒業生で構成される後援会から大学の事業に対して財政的支援を得ている。附属図書館も種々の事業がこの寄付金でまかなわれてきたが、平成19（2007）年度からは懸案だった非図書資料の整理・修復保存・電子化事業のための助成を得ている。外部資金の獲得は大学を挙げて模索されており、この点でも、例えばオープンキャンパスやホームカミングデーには、図書館見学と図書展示会という形で参加するなど、附属図書館も積極的な貢献を果たしている。国から支給される予算の減少が図書館活動そのものの停滞を招かないようにする努力が要請されているところである。

7. おわりに

昨今のインターネット環境の普及や電子媒体の登場は、図書館の業務やサービスを従来の紙媒体の所蔵と図書館員による人的なサービスから、ネットワークを基盤とする電子ジャーナルや電子書籍、データベースという電子的サービスに移行しつつあり、図書館の中でもコアな業務やサービスになりつつあることはいうまでもない。本学もそのような時代の潮流に遅れることなく、対応をしているが、しかしながら、決して電子的サービスが最大の目標や目指すものではないし、そこに本学附属図書館の優位性や独創性を求めるものでもない。

平成18（2006）年7月には、図書館資料の展示に

関すること、個人文庫及びコレクションの整理に関すること、図書館資料の修復及び保存に関すること、図書館資料の遡及入力に関することを主に扱うために学術企画主担当¹³⁾という組織が新設された。平成19(2007)年4月にはこの組織に専門助手¹⁴⁾2名を配置して更なる強化を図っている。また、情報リテラシー教育プログラムの一層の充実を図るため、および、レファレンス・サービスの充実を図るため、参考調査係と相互利用係が統合しレファレンス主担当となったのも平成18(2006)年7月のことである。これらの組織再編は、本学附属図書館が力を注いでいるコアな事業が何であるかを端的に示していると言えるだろう。

大学図書館の場合、図書館としての機能は同じであっても、それぞれ担うべき役割は異なるものであり、その役割に対して何がコアであるかを判断し、それに基づいた戦略を展開することが求められるのではないだろう。

大学図書館ランキングの部門別評価は自館がどのような特徴を持っているかを浮き彫りにしてくれる。本学の場合は、蔵書数・貸出数が安定して上位に位置しているのが強みである。ランキング順位に影響を与えているのは図書館費と受入数だと考えられるが、受入数は、本学だけでなく他大学でも、年度による変動が激しい。まとまった寄贈の有無や、限られた図書整理の人員を新規受入と遡及入力に投入するときのバランスによると考えられる。図書館費は、法人化以降は低下傾向にあるとはいえ、比較的優位を保っており、それが本学の豊かな蔵書を支えてきたといえる。図書館という従来の基本的、伝統的なスタイルを見失うことなく、図書そのものが持つ力を充分認識し、冊子体へのこだわりをもって、100年、200年単位で文化遺産としての図書を継承していくことが本学図書館のアイデンティティとなっていると考えてよい。社会科学系の蔵書の量と質を将来に渡って維持し、それをいかに有効に利用に供していくか、これが本学附属図書館を性格づけている中核的な活動であり、そのための業務やサービス戦略を展開することがコンピタンスに繋がるものと考えている。

- 1) G. ハメル, C.K. プラハラード著; 一條和生訳. コア・コンピタンス経営. 日本経済新聞社, 1995.3.
- 2) 週刊朝日編. 大学ランキング. 1998~2007年版. 朝日新聞社, 1997~2006.
- 3) 2002年まではABC判定をしていたが、2003年以降は点数化されている。また、2004年以前は、アンケートではなく、日本図書館協会発行の『日本の図書館』から各年度の2年前のデータを採取してい

る。

- 4) 表3から表6までの統計データはすべて各年度の『一橋大学附属図書館概要』に拠っている。“一橋大学附属図書館概要”(オンライン), 入手先 <http://www.lib.hit-u.ac.jp/service/gaiyou/index.html> (参照日付2007-04-20)
- 5) “一橋大学附属図書館所蔵文庫・コレクション・特殊資料紹介”(オンライン), 入手先 <http://www.lib.hit-u.ac.jp/service/bunko/bunko.html> (参照日付2007-04-20) 一橋大学附属図書館編. 一橋大学所蔵文庫・コレクション紹介. 一橋大学附属図書館, 2006.6を冊子体でも刊行している。
- 6) 社会科学古典資料センターは1850年以前に刊行された資料やメンガー文庫, ギールケ文庫, フランクリン文庫の個人文庫等を所蔵している。14-15世紀まで遡る資料も含まれているのに加えて, 限定版, 初版本, 重要な人物の旧蔵本ととくに自筆書入れ等のあるものなども見られ, 世に誇れる貴重書である。
- 7) 岩猿敏生, 大城善盛, 浅野次郎著. 大学図書館の管理と運営. 日本図書館協会, 1992.4.
- 8) 小幡英樹. 本は, 置くもの?使うもの? - 資料保存研修会の実施について. 鐘. No.37, 1999, p6.
- 9) 修学旅行報告書は貴重資料指定しており, 下記のページに一覧リストがある。“本学学生調査報告”(オンライン), 入手先 <http://www.lib.hit-u.ac.jp/service/bunko/houkoku.htm> (参照日付2007-04-20)
- 10) 高等商業学校一覧. 高等商業学校. [1888]
- 11) “一橋教員の本”(オンライン), 入手先 <http://www.hit-u.ac.jp/academic/book/index.html> (参照日付2007-04-20)
- 12) “TZ<本の窓>”(オンライン), 入手先 <http://www.lib.hit-u.ac.jp/service/tenji/takamoto/tz/> (参照日付2007-04-20) このコーナーに関しては, 石山夕記. 蔵書を活かす. 図書館雑誌, Vol.100, No.3, 2006, p147-149. にも紹介がある。
- 13) 本学では各課の下には係を置かず, 「主担当」という形で主に担当する業務を示している。一橋大学附属図書館編. 一橋大学附属図書館概要. 平成18(2006)年度. 一橋大学附属図書館, 2006, p18. “一橋大学附属図書館概要”(オンライン), 入手先 <http://www.lib.hit-u.ac.jp/service/gaiyou/gaiyou2006.pdf> (参照日付2007-04-20) に, 現在の組織図が掲載されている。
- 14) 本学の助手制度改革の中で新設されたポストで, 従来の研究助手とは異なり, 教育・研究の高度なサポート業務を行う図書館員という位置づけである。

<2007.5.2 受理 とよだ ひろあき 一橋大学学術・図書部情報推進課課長代理・兼情報企画主担当主査
たかはし ななこ 一橋大学附属図書館学術情報課図書情報主担当・兼学術企画主担当>

Toyoda Hiroaki, Takahashi Nanako

The collection management and usage of Hitotsubashi University Library: our core competence from a viewpoint of the university library ranking

Abstract: This paper considers Hitotsubashi University Library's core competencies from the viewpoint of the four criteria (volumes held, volumes added, volumes circulated, and budget) established by "university library rankings." In this paper we introduce advantages of the central library system : the university budget distribution allowed us to develop collection strengths in the social sciences and eliminating duplicates raised awareness about preservation. Furthermore we improved access by putting 1,000,000 volumes into the open stacks and by exhibiting books for students on the shelves.

Keywords: Hitotsubashi University Library, core competencies, university library rankings, collection development, exhibition on the shelves, preservation, central library system